

現代社会における食の実践

——ブルデューの食の文化社会学をめぐって——

島根県立大学 村井重樹

1. 目的

本報告は、現代社会における食の実践や嗜好の様態を、ブルデューの文化社会学の視座を参照しながら考察することを目的とする。ブルデューは、『ディスタンクシオン』（1979）において、芸術や音楽やスポーツの実践と並んで、食の実践を社会学の重要な分析対象としている。その際、ブルデューは、経済的な必要性からの距離を媒介にして、必要趣味と自由趣味の対立を見出し、食の実践を、量と質、重いものと軽いもの、実質と形式などの軸に沿って分類することで、そこに階級的な差異が存在していることを描き出した（村井 2015）。本報告は、こうしてブルデューが導き出した食に関わるいくつかの社会的命題が、現代日本社会においても妥当性をもつのかどうかを実証的に検討する。また、これらの分析結果とともに、ブルデューから示唆を受けた食の文化社会学の研究動向を踏まえることで、多様な食のトレンドが見られる現代において、食の実践はいかにして分析可能かについても考察する。

2. 方法

本報告では、2019年1月末～3月に実施した「文化と意識に関する全国調査」のデータを用いる。本調査の母集団は、18歳～60歳未満（2019年1月1日時点）の男女、郵送法による質問紙調査で4000名に配布し、1272名の有効回答を得た。有効回収率は32.0%で、男女の内訳は、男性508名（39.9%）、女性764名（60.1%）である。本報告では、この調査の食に関わる質問項目を利用し、食の実践が、収入、学歴、年齢、性別等によって、どのように規定されているかについて分析を行う。

3. 結果と議論

分析の結果、たとえば、食事の場所の好みとしては、収入が高く、高学歴の人びとが、「高級なレストランや料亭」を好み、「ファミリーレストラン」を避ける傾向が見られた。同様に、幼少時の文化資本の豊富な人びとが、「高級レストランや料亭」を好きな場所と考える傾向があることが分かった。また、好きなタイプの料理については、「独創的で、異国風の料理」を収入が高く、高学歴の人びとが好む傾向にあることが確認できたが、一方で、「健康的で、あっさりした料理」は、年齢の高い女性の間で好まれ、「量が多くて、こってりした料理」は、年齢の若い男性の間で好まれていることが見出された。したがって、好きなタイプの料理に関しては、ブルデューが示したように、必ずしも階級的に食の嗜好が分かれているとは言えず、性別（ジェンダー）や年齢が有意な効果をもつことが確認できた。

現代の食の領域は、これまで文化的正統性を体現してきたフランス料理の脱聖別化とともに、高級料理の大衆化やカジュアル化が進むことで、文化的正統化の様式が複雑化していると指摘されている（Johnston and Baumann 2015）。それゆえ、本報告では、以上のようなデータ分析の結果と、食の領域の背景を構成する文化的・歴史的トレンドなどを踏まえたうえで、現代社会における食の実践の文化社会学的な分析可能性についても考察することにした。

文献

Johnston, Jos?e and Shyon, Baumann, 2015, *Foodies: Democracy and Distinction in the Gourmet Foodscape (Second Edition)*, Routledge.

村井重樹, 2015, 「食の実践と卓越化——ブルデュー社会学の視座とその展開」『三田社会学』第20号: 124-137.